ソーダ色の空

萩原和輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ソーダ色の空

【Ｎコード】
Ｎ３９９４Ｅ

【作者名】
萩原和輝

【あらすじ】
主人公、矢上和也（やがみかずや）は自分なりに普通の学校生活を送っていた。幼なじみの奈美や友人の涼と。しかし、入学式がすべてのきっかけとなった。式の準備中に２年間別居中の姉と再開。そして、式では……。矢上和也は明らかに違う１年を歩みはじめた。

※いつのまにか７万ＰＶ突破してました！皆様、本当にありがとうございます。

ｐｒｏｌｏｇ・１―始まり―（前書き）

他の作品と並行して進めているので投稿が不規則になると思いますが頑張ります。よろしくお願いします。

prolog・1―始まり―

「おい、そこにいるの、こっちこっち」

「この椅子、もっとない？」

ほとんどの生徒が入学式の準備をしている。

生徒達の声が響くここは体育館。

普段、運動をする場所がまるでコンサートホールに変わって行く。

俺はというと、サボっている。

「ふぅ…」

「おい和也、なーにため息ついてんだ？」

この忙しい中、俺と同じで暇な奴がいる。

霧島涼（きりしまりょう）。

この学園に入ってできた友達？だ。

「同感だ…」

俺達は2人で体育館の外にいた。

実際のところ、俺はサボるつもりはなかった。

それをサボるということは、それなりの理由があるということだ。

＜ぱたぱたぱたぱた……＞

「ん……？」

足音……？

「ちょっとーーーー！！！！」

「うぉっ！！？」

何かがもうスピードで走ってきた。

「何サボってんのっ！！」

「って奈美か……」

霧島奈美。

こいつは昔からこの学園現在までずっと同じクラス。

なんの因縁があるのだろうと今も思う。

「『奈美か……』じゃない！！忙しいんだから手伝ってよっ！！というかサボる子じゃなかったでしょ！？」

だいぶご立腹のようで。

でも、こちらにも退けない理由がある。

「今日はダメだ」

「……なんで？」

「言わなきゃダメか…？」

「うん」

奈美は真っ直ぐこちらを向いている。
なんか取り調べみたいだ。

「はぁ……」

深いため息をついた後、ゆっくりと話し始める。

「姉さんだよ……」

「姉さん？誰の？」

「俺」

「えー！お姉さんいたんだぁ。長い付き合いなのに知らなかったよ」

「まぁこれだけは命がけで隠してきたからな。別居中だし」

そう。
俺は、姉さんのことだけは誰にも悟られないで生きてきた。
ずっと違う学校だったし、2年前くらいからは仕事の関係で家を出たので知られることもないと思っていた。

「なんで隠してたの？というかそれ、サボるのと関係ないでしょ？」

「今、ここにいる」

「へ？？」

「だから、この学園に今いるって言ってんの」

「えっ何で！？」

まぁそれが普通の反応だな。

「準備のために業者来てるだろ？配線関係の。あの中に１人だけ女がいなかったか？」

「うん、いた。１人だけ女性だったから目立ってたよ。しかもすごい綺麗だった…作業着なのがもったいないくらい。」

「外見に騙されちゃダメだっ！俺は今、姉さんに会ったらマズいんだ！」

「あの人がお姉さん！？」

奈美はさっきから驚いてばかりだ。
というか俺もびっくりしたところだ。
ＩＴ関係の仕事に就いたはずの姉さんが作業服で学校にいるんだもの。

「俺はあの女に何回地獄を見せられたか…」

体が自然と震えていた。

「なんかつらそうね……。しょうがない、今日は見逃してあげる」

「ものわかりがいい奴で助かったよ」
「はいはい……。というわけで…霧島君？」
ずっと俺の影にいた涼が驚く。
「行くよ？」
「えー、や…ぐふっ…」
涼の土手っ腹に奈美の何かが入った。
涼はぐったりして動かなくなった。
「こいつ連れてくね」
「おぅ」
奈美は涼を引きずって行く。
「あ、そうだ和也」
「ん？」
「貸し一つね♪」
「……わかったよ」
貸し、か……
これはこれで嫌な予感がするけど姉さんに会うよりはずっとましだ。

さて、涼も行ったことだし教室で寝てるかな……

「ふぁあ……」

重い足取りで教室に行く。
いや行こうとしていた。

それは階段を昇ろうとした時だった。

急に体が震えた。
目の前に人。
そこには絶対に出会ってはならなかった人が立っていた。

「やっと見つけた……」

「……ど、どなたでしょうか？」

全身全霊で俺は知らないふりをした。
しかし、無意味だった。

「か～ずや～♪♪♪」

実姉が抱きついてくる。
「矢上紗耶香（やがみさやか）」。
魔王・紗耶香。
黒髪の長髪が恐怖を思い出させる。

「おいっっ！？やめろってっ！！見られてるっ！！」

俺は無理やり引きはがす。

「もーーーー、2年ぶりなんだからいいじゃない」

「知るか！！」

「ねぇ、今日の放課後待ってて」

「い、や、だ！！」

「待ってて。」

「やだって！！」

ビシッ！！

「フフフフフフフフフフフフフフフ」

何かが空気を変えた。

その何かとはもちろん魔王様だが。

「……わかりました、お姉様」

逆らえなかった。

「はーい♪じゃあ仕事あるからまた放課後ねーー♪」

姉さんはスキップで去っていった。

「ぐふ……もうダメだぁ……」

最悪だ。
奈美に見逃してもらったのにも関わらず見つかってしまった。
重い足で階段を昇る。
その階段が１３段に感じた。

※※※

教室につくと誰もいない空間が広がっていた。
もちろんといえばもちろんだが。

「入学式か……。関係ないけどな……」

――窓を見ると桜と青い空

――舞い上がる桜の花びら

――最初で最後の１年が始まった

ｐｒｏｌｏｇ・２―奈美と姉―

憂鬱。
なんて憂鬱なんだろう。

校門で待つという行為が今はすごく嫌なのだ。
いつ、あの魔王がくるか……
ヤバい。
逃げたいけど逃げるともっとヤバい。
「頼む！！こないでくれ！！」
「お待たせ♪」
なんで祈った瞬間に来るんだよ。

「さぁて、久しぶりなんだから遊ぼうか。和也もあの家じゃなく普通の家に住んでるんだから」
「……？お、おう」
あの家？
何のことだ？
「じゃあまずおんぶ」

「無理…」

何を言ってるんだ、この人は。

「なんでぇ〜」

「ツッコミどころ多すぎだ」

というかこっちの台詞だ。

「昔はしてくれたじゃん」

「今と昔は違うだろ…」

怒る気力もない。

たとえ怒っても、逆に殺されて終わり。

というか大きな疑問が。

「そういや姉さん、なんでここにいるんだ？」

「仕事クビなった…」

「……。……だからあんな作業着着て仕事してたのか。……で、これからどうすんの？」

「家帰る」

「は！？」

「家に帰るの」

「本当に帰ってくるの？」

姉さんは静かに頷いた。

「……」

終わった…

この２年間、やっと平凡な日々を送れていたというのに…

「あんの、専務めぇぇぇ！！」

「はいはい、落ち着いて…」

叫びたいのはこっちの方だ。

さらば　ｍｙ　ｈａｐｐｙ　ｌｉｆｅ……

「あっ、和也っ」

「ん？……奈美？」

奈美が駆けてくる。

「あららぁ…結局見つかったんだ」

「おかげさまで……」

これならサボってもサボんなくても同じだったな。

「あ、初めまして。和也の姉の紗耶香です」

いきなり挨拶する姉。

「き、霧島奈美です、こちらこそよろしくお願いします」

そりゃあ、ぎこちなくなるだろう。

「ところで霧島さんって和也の彼女？」

「っ！？違っ…」

「そうでーす♪」

俺は驚いたのに奈美は元気に答えていた。

もちろん彼女ってのは冗談だけど。

「はぁ…」

「なーに彼女の前でため息ついてんの和也は」

「だから彼女じゃないって…」

「そうだ、霧島さんも今から遊び行かない？」

「え…でも姉弟水入らずの方が…」

そうだ、奈美。
お前はいい子だ。
このまま行ったら、2人分の金を俺がもたなきゃダメになる。

「いいのいいの。どうせ2人じゃ和也がそっけないし。」

「じゃあお言葉に甘えて…」

軽…

マジかよ…
しかも最悪のタッグだよ…
せめて片方にしてくれよ…

「じゃあ行きますか」

「ですね」

「……」

「行きますよ…和也」

「はい…」

2人分おごり決定。
足取りは重い…

俺たちは商店街へ向かった。

※※※

商店街に着いて、いろんな店を見て歩く。
意外と奈美も来てよかったかもしれない。
奈美が姉さんと一緒にはしゃいでくれてる。

「あ、これもかわいい！！」

「わぁ！！」

てか、俺は必要なくね？？

長い長い買い物。
でも2人が買ったのは服を1、2着だけ。

時間だけ無駄に使った様に見えるのは、俺が男だからだろうか。
とか言う俺も、その間ベンチで惰眠を貪っていたが。

「じゃあ喫茶店でもよりますか？」

「いいですねぇ！」

「俺…も？」

「当たり前じゃない。あんたが私の財布なんだから。」

こんな姉やだ…
けど逆らえない…

結局、俺は喫茶店で2人分プラス自分の分のお代を払った。

「はぁ…」

帰り道もため息。

前では2人楽しく会話。

「明日は入学式だってのに…」

あまり自分には関係ないが言葉に出てしまう。

「あ！！」

急に姉さんが声を上げた。

「どうした？」

「作業着忘れてきた！！」

そういや姉さんは手ぶらだ。
荷物はポッケに携帯と財布くらいだろう。

「あーあ…まぁ俺が明日取ってくるよ。」

「やった！ありがとっ」

どうせ姉さんのことだ。
遅かれ早かれ、俺が取ってくることになっただろう。

※※※※※※※※※※

「じゃあ霧島さん、さよなら」

「あ、はい。おやすみなさい沙耶香さん」
家につくとすぐ姉さんが家に入って行った。
早く、母さんと父さんに会いたかったんだと思う。
「じゃあまた明日な。」
「あ、待って」
俺も入ろうとしたところを奈美に止められる。
「なんだ??」
「今日のお茶代。」
奈美はそういうと五百円玉をなげてきた。
「お!!いいのか!?」
「うん。釣はいらないよ。」
ヤバい。
かなりありがたい。
このままだと、今週は昼食で飲み物なしになるところだった。
「奈美、あんたはいいやつだよ…」
そういうと、照れて苦笑いをする。
かわいいとこもあるもんだ。

「ま、どうせ食べた分だし……よし、時間も時間だしあたしも帰りますかね」

「おぅ、気をつけろよ」

「うん、じゃーねっ」

※※※※※※※※※※

疲れた。

足が浮腫んでいるのは長い距離を歩いたからだろうか。

ベッドに入るとすぐに睡魔に襲われた。

「……」

〈ガチャ〉

ドアを開ける音。

「ただいま……和也…」

――おかえり、姉さん

俺は心でつぶやいた。

ｐｒｏｌｏｇ・３―入学式―

さて…
待ちに待たない入学式がやってきた。
式やるのは新入生だけでいいだろ…
忘れないうちに姉さんの作業着をしまっておく。
入学式が始まるまで体育館で待機する。
「おい和也。」
「なんだ？」
よっぽど暇なのか、涼が話しかけてくる。
「入学式って言うけど知ってるやつ入るか？」
「いや、特にいないな…」
これが面倒くさい理由の１つになっている。
涼
「つまんねぇ…」
和也
「つまんねぇ…」

先生たちも並び始めた。
そろそろ始まるみたいだ。

吹奏楽部の演奏で新入生たちが入場してくる。
みんなは手拍子。
俺はというと…面倒くさくてやってない。

「こらっ」

奈美に叩かれる。

「わかったわかった」

俺はだるそうな拍手をする。

新入生を見てみるけど知ってるやつが本当にいない。

新入生が並び終わると式が始まる。

名前が1人ずつ呼ばれていく。

「ここが一番長いんだよな…」

「長瀬（ながせ）　麻衣（まい）」

「はい」

「真悠　さくら（まゆう　さくら）」

「はいっ」

順調に進んでいた式。
だけど途中で止まった。

「三波（みなみ）　結衣（ゆい）」

「……」

「三波結衣」

「……」

「どうしたんだ？」

体育館がざわつく。

「って、あれ…？」

その三波結衣と思われる女子生徒はこちらの上級生側に向かって歩いてくる。

きれいな黒茶の髪が目立つ。
そして彼女は…俺の前に立ち止まった。
「！？」
「名前を教えてもらえますか？」
「俺っ！？」
彼女は無言で頷く。
こ、ここは答えるべきだろうか？
「……矢上和也」
「和也さん…ですねっ？」
彼女は嬉しがっていた。
理由はわからない。
誰かすらわからない。
「じゃあ私は戻りますので」
戻っていった…
「あいつ誰だよ…」
視線が痛い。
涼は笑っている。

後で死刑。

奈美が話しかけてくる。

「ちょっと、誰よあの子？」

「俺が知るわけないだろ…」

入学式は一時中断したものの、その後は何事もなく進んでいった。

「さて、あいつは誰なのか」

放課後。

俺の机の横に奈美と涼。

「だから俺は知らないって」

「どうしよう…このままじゃ和也がロ…」

「おいっ！！」

まったく…

「和也さんっ」

「うわっ！！……お前は…」

俺の後ろに三波結衣が立っていた。

「はいっ。三波結衣です。いっしょに帰りませんか？」

「え…」

「ちょっと待った――――！！」

奈美がいきり立ってる。

「あんた誰！？和也とどんな関係！？」

奈美が爆発してるのに対して三波は冷静。
というか鈍感。

「三波結衣です。よろしくお願いします。」

「あ、私は霧島奈美で……って違――う！！だから三波さんは和也とどんな関係なの！？」

「関係…ですか？……ないですよ。」

「は？」３人ともよくわからない。

「…じゃあなんで和也…？」

「和也さんがよかったからですかね♪本能ですよ、本能♪」

……

かなり変な人だ。
俺は嬉しがればいいのか？
悲しめばいいのか？

結果、奈美と涼と三波と４人で帰ることになった。

俺は、不安を抱えながら門を出た。

ｅｐｉｓｏｄｅ・１―炭酸―

なんでしょう、これは？
三波が俺の横にくっついてくる。
奈美は三波をじっと見ている。

さすがにこの状態はきつい。

「ねぇ、ちょっと……」

「なんですか？」

「歩きづらい」

「いいじゃないですかぁ」

「和也がつらそうでしょ！」

奈美はずっと三波結衣に喧嘩腰のまま。
三波は適当に流している。

「疲れた……」

家なら休める……って姉さんがいたーーーー！

誰か……俺に休む場所を……

「和也さん、このまま喫茶店かどこか行きましょうよ」
「金ないんだよ」
「そう、和也は金ないのっ」
奈美、そのフォローはひどい。
「私がおごりますよ♪」
「まじ！？」
「まじですよ♪」
「じゃ行くか…がっ……」
奈美が襟をつかんで引っ張ってきた。
「奈…美…？…苦しい…」
「あんたぁ…」
奈美が怖い…
でも、無料のお茶会は捨てがたいのだ。
「俺は金に弱いんだよっ！」
「ならあたしが、おすすめのをおごってあげる」
奈美が？

おすすめ？

何か嫌な過去があった気がする……
というか嫌な予感しかしない。

確か3年くらい前…
奈美が今のように珍しくおごってあげると言ってきた。

なんでも、美味しいのを見つけたとか。

喜んで食い付いた俺が馬鹿だったのだ。

奈美のおすすめはソーダ。
なんの変わりもないソーダ。
いや、ただ、ソーダをおごってもらえるなら嬉しい。
でも、違った。

いろんな種類の炭酸ジュースを持ってきたのだ。
その時初めて気づいた。
奈美は炭酸狂だと。

その後はとにかくきつかった。
飲まないと泣きそうになるし、胃は破裂しそうだし……

まあ、その日はずっと炭酸ジュースを飲むはめになったということだ。

「奈美は……いいや」
「なんでよ！？」
「おすすめって…炭酸だろ？」
「うん♪」
「却下」
「えぇーっ！」
「正直、お前の炭酸狂にはついていけない…」
「だぁれが炭酸狂だー！！」
もう奈美に勝ち目はない。
「じゃあ、行くか、三波嬢」
「はい♪でも嬢は止めてくださいよっ？」
「あたしも行く……」
奈美はふくれっ面してついてきた。
「あの……」

「ん？」

男の声。

「俺は…」

涼だ。

存在すら忘れてた。

ｅｐｉｓｏｄｅ・２―理由―

さて、注文だ。

「好きなの選んでくださいね」

「よっしゃ！」

メニューを手にとってみる。
やっぱりここはカフェオレだろうか……それにケーキかな…

「じゃあ俺は…これとこれ」

「はい。じゃあ私も同じで♪」

「私、メロンソーダ」

「俺、オレンジジュース」

奈美はやっぱ炭酸。
まぁ２人は自腹みたいだ。

※※※

「どうぞ」

店員がカフェオレを持ってくる。
そしてみんなにも届く。

「じゃあいただきます」

やっぱただはおいしいねぇ。
みんなもそれぞれに美味しそうな物頼んでる。

「ぷはっ、うまい！」

奈美、あんたは親父か。

「奈美さん、本当に炭酸好きなんですね」

「そりゃあそうよ。もやもやが吹っ飛ぶし、おいしいし」

なんだ、その麻薬みたいな効果は。

「それにね」

「それに？」

「やっぱいいや」

「なんだそりゃ」

結局、奈美はそれ以上教えてくれなかった。

※※※

「５２３０円になります」

「……」

やべぇ……ちょうしにのりすぎた。

「三波……さん……。ゴメンなさい」

「大丈夫ですよ♪どうせですから今日は全員分おごりますよ？」

「金大丈夫？」

「うん、さすがに後輩におごらせるのは気分が悪くなるよ……アタシ、半分だすよ？」

奈美も相手が三波だけど気をつかってる。

「本当に大丈夫ですよ♪」

「！？」

なにぃ！？

三波の手には諭吉がいた。

しかも財布の方にも５人ほど。

俺なんか半年に一回触るかわからないのにっ。

「……」

みんなの意見は、三波に任せるということで一致した。

※※※

小さな交差点。
もう、陽は沈んでいた。

「今日はありがとうございました♪」

いや、それはこっちのセリフだろう。

三波は違う方向に向かって歩いていく。

「じゃあな」

「はい、また明日♪」

三波は、綺麗な髪をなびかせて帰っていった。

「俺もこっちだから」

涼も違う道。
というか、今日存在感なかったな。

「俺たちも帰るか」

「うん」

奈美と並んで歩く。

「2人で帰るの久しぶりだね」

「まぁな」

小さいときはよくいっしょに帰ってたと思う。
やっぱり途中で男子女子で別れる時期があるのだ。

「あ、自販機！！」

いっつも見てる自販機じゃないか…

「和也、おごって♪」

「嫌に決まってんだろ」

「なんでよっ？」

「俺は残金５００円でこの一週間を乗り切るんだぞ！？ここで5分の1を失いたくない！！」

恥ずかしいが本当に無理なのだ。
財布の中身はワンコインです。

「しょうがないなぁ」

そう言って奈美は自販機に向かっていった。

ガコンガコン

「……2本？」

「アタシからプレゼント♪」

そう言ってサイダーを投げてきた。

「やっぱり炭酸か……。まぁ嫌いってわけじじゃないからな。ありがたくもらっておこう」

「うまいよ～」

奈美は上機嫌だ。

学校を出るときはあんなにムッとしてたのに。

「ぷはっ」

だから親父かって…

「そういや、店で言いかけたのって何だ？」

「えー…今聞く？」

「うん、早く言え」

すると奈美は落ち着きがないように考えこむ。

「う～」

「なんだ？何もないっていうオチか？」
「違うよっ……。……誰にも言わない？笑わない？」
「……うん？」
「なんで疑問形よっ！！」
奈美が殴りかかってくる。
「わかった、わかった」
奈美はまだ落ち着いてないようだったが、ゆっくり話しはじめた。
「……ソーダとかって空の色できれいじゃん？」
「……」
「……」
「それだけ？」
「うん」
「ん……あ、言ってた…確かにいっつも空が好き、とか言ってたな」
ほんとバカだったよな、なんて口が裂けても言えない。

「なんかねぇ……初めて飲んだソーダを…その…」
笑いをこらえる。
まさかの理由だ。
「和也…顔が笑ってるよ…」
「！？」
声の方を意識しすぎてた…
「……まぁいいよ」
ほんとにいいのだろうか。
奈美の右手には握り拳が。
「……で、でも空色ったってそんなソーダ少なくないか？普通は透明だし…」
「初めて飲んだのが、そんな色だったからさ……」
確かに奈美は小さい頃から空が好きだった。
空を飛びたい。
泳ぎたい。
終いには食べたいってまで言い出した。
奈美の炭酸狂は、あの頃から始まっていたのかもしれない。

ｅｐｉｓｏｄｅ・３―夕飯―

「おかえり～」

７時、家に到着。
魔王様が迎えてくれる。

「ただいま、まお…姉さん」

「まお？」

「いや、かんだだけ」

魔王様なんて言えるわけないだろう。
言ったら即首がとぶ。

「さてさて、ご飯ですよ」

姉は元気に言ってきた。

でもけっこう食ったしな…

「あ、外で食べてきたから大丈夫だぞ」

「わたしが作ったの♪」

「…いや、だから俺は…」

「作ったの♪」

やべえ、話が通じねえ。
しかも顔は笑ってるけど心は爆発寸前だよ。
「あなたは死にたいみたいね」なんて殺気すら感じとれるよ。

「……ありがたくいただきます……」

そういうしか選択肢はなかった…

「うん♪」

……？

そういや姉さんって料理作れたっけか…
家を出る前は我が家の生物兵器とさえ言われた腕の持ち主だが…

自然に体が震え始めた。

「じゃあ台所でまってるからね」

上機嫌な姉はスキップで去って行く。

「……こわい……」

＞♪♪♪♪♪♪♪＜

携帯が鳴った。
奈美だ。

「あ、もしもし和也？今日、間違って和也の教科書持って帰っちゃ

ったから明日帰す……って和也泣いてる？」

「俺は今まで幸せでした…ただ、やりたい事はまだいっぱいありましたけど…。まぁ馬鹿ばかりしてましたけどね、本当にやりたいことってのもちゃんとありましたよ？」

「か、和也？」

姉が帰ってきてから一番目の試練が始まった。

ｅｐｉｓｏｄｅ・４―罰―

「さあ召し上がれ♪」

椅子に座った俺は驚愕した。

うまそう。

確かにうまそう。

でもテーブルぎっしり料理が並んでいたのだ。

「母さんと父さんは？」

「なんか具合悪いとか言って夕飯前から寝てるよ」

逃げやがった…

俺の両親は息子を生け贄に捧げやがった…

「…いただきます…」

「どうぞ～」

最初にカニ玉らしきものをつまんで食べる。

「……まさか…うまい……」

「でしょ？」

姉は満面の笑みをこぼす。

まさか数年でここまでとは…

「じゃあごちそうさま…」

「は？」

「あの、腹いっぱいで…」

「まさかカニ玉一口で終わりなんてね、そんなことないわよねぇ…」

「本当に無理です…」

「食べて」

「……」

「食べろ」

「吐いちゃう」

「食べなさい！！」

「！？」

こぇぇ…

でも、本当に腹がやべぇ…

「姉さん…今日だけは…」

「却下」
もはや聞く耳もたず。
さすがに俺だってカチンとくるときはくる。
「まじ無理って言ってるだろ！」
「死ねぇ！！」
「！？」
答えた瞬間に鉄拳が飛んできた！
し、死ぬ。

だが、俺は前とは違う。
あんたを見返すために筋トレをしまくったのだ！！
「はっはー。俺だって強くなってるのさ」
俺は姉さんのパンチをしたことで得意げになっていた。
もう姉さんに怯えなくてもいいんじゃ…
「和也…」
「…！？」

ビシィィ……

「…？」

「やっと本気が出せるわぁ」

＞メキャ＜

姉は握力でテーブルの足を砕いた。

ヤバいヤバいヤバいヤバい

台所なので逃げる場所もなく。

「フフフフフフフフフフフ」

「……すいません…すいませんすいませんっすいませんっすいませんっすいません……ぎゃあああああああ！！！」

ｅｐｉｓｏｄｅ・５―教室―

「ぐあぁ」

不自然なため息と同時に教室の椅子に座る。

「おっはよ、和也…ってどうしたの…？やつれてる…？」

「ちょっと、魔王様にやられました…」

「あらぁ……ってあの姉さんが和也をここまで叩きのめすんだ…」

「まぁな」

奈美はまだ想像がつかないのか…

「俺、もう帰りたくない…」

「……うちに泊まる？」

「！？……ばかやろう……」

「あははっ」

やっぱ冗談か…

「まぁいずれ、ほんとに逃げるかもしんないからな…」
というかもう逃げたい。
そしたら涼の家にでも行くかな。

「そういえば和也のお姉さんって同じ学園じゃなかったの？そんなに年違わないだろうし、私が見たことないっておかしくない？」
確かに。
俺と姉さんは3つしか違わない。

「姉さんはな…頭、いいんだよ」
「？？？？？」
「飛び級だよ、飛び級！」
「はぁ！？」
「しばらくはどっかに通ってたからな…」
奈美は驚いたままだ。
「頭いいのかぁ……」

「って俺を見るな！！」

「お姉さんすごいねぇ」

「まぁ姉さんもそれはそれで大変だったみたいだけど」

「ほらっ席つけっ」

先生が１０分早く教室にくる。

「っと、またあとでね和也っ」

「おぉ」

そして今日も授業はつまらなかった。

「終わった…」

放課後。

教室をでる。

そのまま家に直行……なんて甘くなかった…

「じゃあ帰りましょうか、和也さん♪」

「三波……」

俺の教室前にこられても……

「荷物持ちましょうか？」

教室からの視線が痛い。

ただでさえ奈美と仲がいいことでからかわれているのに…

その内半分は

「妬み？」なのか殺気を感じる時がある。

「今日はちょっと用事が…」

「私もお供します♪」

「つまんねぇぞ？」

「いいですよ、いっしょに帰れれば…」

そこで赤くなるな…

やべえ。

視線がやべえ。

誰か、助けて…

「和也〜」

おぉ。

助けが来た……奈美かよっ！！

火に油だった…

ｅｐｉｓｏｄｅ・６―遊びの約束―

そんなこんなで今３人でいるこの状況。

学校から出るまで何人に変な目で見られたか…
しかも……

「あの…腕はなしてくれない？」

「いや」
「いやです」

両腕をつかまれてる。

「つか、姉さんがくる前に早く帰りたいんだが」

「え～…どっかよりましょうよ～」

すねる三波。
にらむ奈美。

「まぁまた今度だな」

「……じゃあ土日にどっか行きましょうよ」
「は？……」「街に行きたいです……」
「う～ん…」
街っていってもなぁ…
金もないし…
でも姉さんから逃げるチャンスだしな…

考えた結果。
最低な答えにたどり着いた。

「三波…。その日、資金面で心配しなくていいのか？」
「もちろんです♪」
後輩にたかってしまった。

「私も暇だから行っていい？」
「もちろんいいですよ♪」
奈美は負けじとくらいつく。

「じゃあこの3人で行きましょう」

「ちょっと待ったー！！」

どこからともなく奇声が聞こえる。

「フハハハハハ！！誰だと思う？」

「どうせカスだろ」

「ダメ人間だよね」

「変な人ですね」

「……ひどい」

やっぱり涼だった。

「なんだよ？」

「俺も行っていい？」

「……い…いいですよ」

三波は微妙そうだった。

結果。
メンバーは
「３人＋カス」になった。

結果。
メンバーは
「３人＋カス」になった。

ｅｐｉｓｏｄｅ・７―罰ゲーム―

お出かけ当日。

俺の家にみんな集合。

「あら、奈美ちゃん。あ、みなさんもいらっしゃい」

「あ、お義姉さん、お邪魔します」

おい、義はいらないだろ…

「じゃあ姉さん、みんな揃ったから行ってくるな」

「はい、行ってらっしゃい♪」

なんか今日は機嫌よかったな…

逆に怖ぇよ…

そのまま俺たちはバス停に行きバスに乗る。

つくまで１時間くらいか。

さて、惰眠でも貪るかな…

と思った矢先、ババ抜き大会が開始されてしまった。

しかも罰ゲームあり。

トランプを持ってきたのは奈美。

やろうと言い出したのも奈美。

今一番負けてるのも奈美。

「なんで……また負けた…」

「ちょっと弱すぎないか？こんなの勘が殆どなのに…」

「うるさいなぁ…みんなが強いんだよ」

「ババ抜きが強いって……」

「まぁいいや、なんかぶっちゃけ話でも言えよ」

「うぅ〜〜〜」

そんなこんなで奈美の秘密はなくなっていく。

「もう一回！！」

「はぁ……、もう秘密にしてることなんかないだろ？」

「俺は初めて知ることばっかで楽しいけどな」

涼はそうだろうけど俺はずっと奈美といっしょに過ごしてきたわけで……

「罰ゲーム変えましょうか？」

お、いい考えだ三波。

「愛の告白にしましょう」

やっぱダメだ三波……

「いいよ、それで」

奈美は急かすように言ってくる。

「奈美、いいのか？」

「え、あたし、もう負けることになってるの！？」

「まぁいいや、開始〜〜」

……

「……」

「やっぱな……」

結局、奈美の負けだった。

「もうあたしはダメです…」

奈美は窓から景色を見ている。

「さて、奈美さん。奈美さんの好きな人は誰ですかっ？」

三波が問い詰めている。

「あた…わたし……のぉ…す……」

「？」

「ど、どうした奈美！？」

「ふしゅ～～～～…」

奈美が気を失った…

「あららぁ」

奈美の好きな人ってのは気になったなぁ。
まぁいいか、ババ抜き止めれるし。

なんと奈美はバスが停まるまで起きなかった。

ｅｐｉｓｏｄｅ・８―街―

「ついた～～～」

奈美はバスから降りると一気に元気になった。

まぁあんまり来ない場所ではあるけども。

「さて、店を見て回りますか」

「だな」

久しぶりに来たので雰囲気が少し変わってるような気がする。

なんか前より賑やかになったというか……

まぁ楽しければいいか。

そして、服だの何だのと色々見て回った。

いや、基本的に奈美と三波が行きたい場所に連れて行かれたと言った方がいいだろうか。

「そろそろ休まないか？」

「俺も…つかれた……」

隣で涼がグテッと座った。

まぁ涼は荷物持ちだし、そりゃあ疲れるか。

涼の両腕には大きな袋が３つずつ。

「だらしないなぁ」

「あんたが俺に持たせるから……」

涼は本当につらそうだ。

「まぁ私も炭酸が切れてきたから丁度いいか」

炭酸が切れるってなんだよ？

心の中でつっこむ。

「じゃあファミレスでもいきましょう」
三波の案でファミレスに入ることになった。

「見事に混んでるね」
「まぁ座れそうだからいんじゃないか？」
店員に誘導されてテーブルにつく。
「さて座るか」
俺は奥の席に座った。

「となり、いいですか？」
「え？…まぁいいけど」
三波が隣に座ろうとしてくる。
「待ちなさい」
奈美が腰に手をあて、まるでお姉さんみたいに起こっている。
「どうした？」

「あたしが隣に座ります」
何故に敬語だよ。
「なんで？」
「和也はあたしがいないと何もできないでしょ？だから」
「何言ってんだお前…」
「だから三波さんは涼といっしょね」
奈美は三波を涼へと促す。
「おぅ！俺は大歓迎だ」
満面の笑みの涼。
だが…
「やです」
「……」
涼はショック死した。
「どうするんだ？」
どっちも引かない。

まさか…四つ角の普通のテーブルなのにここまで面倒になるとは…

「和也っ」

「和也さんっ」

「え…えっと……」

怖いよ……

もう何も言えなかった。

ｅｐｉｓｏｄｅ・９―手―

「ありがとうございましたー」

店を出る。

「くはぁ」

ため息にもならない声が出てしまう。

「くはぁって何よ」

「お前と三波のせいだろ…」

結局あのあとも決まらず、まさかの３人で座ることになったのだ。
涼は１人だけ向こう側。

まぁショック受けてたみたいだが。

「疲れたな……」

「えー。まだ時間あるよー」

拗ねる奈美。

本当に炭酸で元気になったみたいだ。

こいつを振ると泡が出てくるんじゃないか…？

「ん～どっかないかなぁ？」

「そうですね…」

試行錯誤を繰り返す奈美と三波。

「そうだ。いい店知ってるぜ。ネットで見つけたんだ」

涼が復活した。

「えっとな……」

涼いわく、裏町があって品揃えがいい店が多く並んでるとか。

「ほんと！？」

奈美と三波はうれしそうに着いて行く。

「なんか嫌な予感するんだよなぁ」

涼が発案ってのが…

「何してんの和也っ。」

「えっ」

手を引かれる。

「おいっ、自分で歩けるって」

「え…あっ、……わっ！！」

手を振り払われる。

奈美の顔が真っ赤。

たぶん俺も…

「ごめんっ。ちょっとボケてたっ」

まぁ悪くはない感じだったけども。

って何考えてんだ俺っ

「い、行くか…」

「う、うん」

前で2人が待っている。

…涼、そのニヤニヤを止めてくれ…

三波は……ってなんで包丁持ってんだっ！？

やばいな…

ｅｐｉｓｏｄｅ・１０―裏街―

「あらまぁ、仲いいわねぇ」

「もうそのネタはいいだろ…」

涼にからかわれるのも久しぶりだな…

いつも冗談を言う奈美も恥ずかしがっている。

「でも仲がいいのは良いことですよ♪」

うん。

三波の言う通りだ。

「で、この路地に入るのか？」

「あぁ」

街の端の一角に裏路地があった。

「なんか怖いよ…」

確かにドラマに使われそうな路地だ。

なんかどんどん嫌な予感がしてきた。
大丈夫大丈夫といいながら進んで行く涼はバカにしか見えない。

「涼さん、死ぬときは事故死ですね…」
三波が言ったこの言葉にかなり同感できた。

涼を先頭に奥に入って行く。
路地を抜けた瞬間明かりがさした。

「！？」

「商店街！？」

表の街並みとは違う街がそこに広がっていた。

「な、ヤバいだろ？」

涼は笑いながら言ってきた。

確かにいろんなものがありそうではあるが…
ガラが悪そうなのが所々に居座っている。

奈美はそれに気付いてか俺の近くに寄ってくる。
早めに出た方がいいな……

「って三波は？」

「え…？」

辺りを見渡すがバカしか見当たらない。

「あ！あそこっ！！」

奈美が指差す方向に三波とチンピラ集団が。

「マジか！」

凄まじいくらい早く絡まれてる！

「涼」

「おう！！」

２人で集団に向かう。

集団のリーダーらしき人物がこちらを睨んでくる。

「誰だよお前ら？」

「俺だ！！」

涼、そのは答えになってない。

「その子は俺たちと行動してたんだ。こちらに返してもらえないか？」

「は？手離すわけねぇだろうが」

やっぱ、やるしかないのか…

「おらぁ！」

涼はもう相手を殴っていた！！

「やっぱこいつバカだなぁ……。…いや、俺もか…」

集団に向かって走り出す。

久しぶりだな、と思いながら相手を殴ろうとした瞬間、空気が変わった。

ビシッ！！

「！？」

恐怖で体が動かない。

まさか……魔王、じゃなくて姉さん！？

後ろを振り返ると最狂、最恐、最強の姉さんが立っていた。

ｅｐｉｓｏｄｅ・１１―魔王―

ビシッ！

殺気。

この場を完全に支配しているのは実の姉。

「ヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバい」

俺は恐怖を察知して下がる。

「姉…さん？」

「フフフ……和也は下がっててね…。ああいう奴らムカつくのよね…」

「……」

笑う時は目でも笑って下さい…

「な、なんだてめぇは！」

ようやく相手のリーダー格らしき人物が口を開く。

「姉よ」

「はぁ！？」

「あんたたちこそ和也に何しようとしたの？和也をいじめていいのは私だけよ。殴っていいのも、叩いていいのも…殺していいのも私だけ」

「え…」

俺を殺す権利が姉にはあった…
しかも、殴ろうとしたのはこっちからだし…

「とにかく、あなた達の死刑が確定した……」

「姉さんっ」

声をかけるが耳に入ってないみたいだ。

姉はジリジリ相手に向かって行く。
間合いに入る。

「執行……開始」

そうつぶやいたと思った瞬間、相手の1人が崩れ落ちた。

「は？」

姉さんは一瞬で1人沈めた。

「この…やろう！！」

「野郎じゃないわよ、野郎じゃ！！」

一斉に襲いかかる相手を次々に殺…、倒していく。

「フフフ…ハハハハハハ！！」

笑うなよ…

あきらかに虐殺が行われている。

慈悲は微塵もなく、終いには相手の髪をむしりとっていたりする。

俺は奈美に問う。

「魔王…だろ？」

「……うん…」

2人で、姉さんを怒らせちゃいけないと確認しあう。

「あれ？涼は？」

「？」涼がいない…

嫌な予感がするが、まさか…

「へぶっ！！」

姉さん達の方から涼の声が聞こえた。

声というかもわからない変な音だったが…

「巻き込まれたな…」

それだけは確認できた。

ｅｐｉｓｏｄｅ・１２―跡―

「ふぅ」

「……」

一通り暴れまわった姉はスッキリしたような顔で相手を見下ろしていた。

そして、近くで姉を見ていた三波は固まっている。

「……相手生きてるか？」

「わかんない……」

俺と奈美では相手の生死さえ確認できない。

と思ったら１人かろうじて立とうとしていた。

「ち、生きてたか」

でも、姉によってとどめがさされた。

本当に殺す気かよ…

姉さんは飽きたようなそぶりでこっちに歩いてくる。

「和也〜♪」

「こらっ！！抱きつくなっ！！」

さっきまでの殺人鬼状態からは考えられない豹変ぶり。

「てかなんでここにいるんだよ？」

「……」

姉さんの目が泳いでいる。

「まさか…ついてきたのか…？」

「……」

さらに目が泳ぐ。

決定。

姉さんはついてきた。

小さい時から姉さんは嘘をつくのが下手だ。

明らかに挙動不審になるからだ。

「姉さん…」

「だって暇だったんだもん！」

「働け」

「……は？」

チリチリ……

「ごめんなさい、冗談です」

「だよねー♪今日はバイトも休みだし♪」

ダメだ……勝てない……

「そういや涼はどうした？」

「え！？友達も中に入ってたの！？」

姉さんはごめんと謝ってくる。

「和也さん、あそこ…」

無事生還した三波が指を指す。

その先には倒れ込んでいる涼だったものが……

「手遅れだな。まぁしょうがないか」

「ですね」

ｅｐｉｓｏｄｅ・１３―跡２―

バチャチャチャ……

奈美が涼に何かの液体をかけている。

「ん……く、ぶはっ！」

涼が覚醒した。

「やっと起きたか…」

うつろな目が痛々しい。

「……ぐ……死ぬかと思った……。…で？何で俺水かけられてたんだ？」

「水じゃないよ。炭酸ジュースだよ♪」

奈美は笑顔で答えた。

「はっ？って甘っ！匂い甘っ！」

涼は炭酸まみれ。

もちろん服はびしょびしょ。

「炭酸野郎はさておいて、ここから早く出たほうがいいな」

「だね～」

相手をぶち壊した姉はのんきにジュースを飲んでいる。

あれ？

姉さんの手から赤い水滴みたいなものが出てる…

「姉さん、手ケガしてるよ」

「ん？あぁこれ？これは相手の血よ♪」

返り血ですか…

「心配して損した…」

「……心配…してくれたんだ…」

あれ？

なんで赤くなるの？

俺たち姉弟だよね？

「ふふふ」

やっぱり姉さんの考えてることはわからん。

今度は微笑んでるし…

「あの…」

「？」

涼が手を上げて話しかけてくる。

「…禁断の愛を実行中失礼ですが……あれ警官じゃね？」

涼の視線の先に警官が5名ほど。

「ヤバいっ」

「あの人たちも仕留めていいの？」

「いいわけあるかっ！！」

さらりと言う姉。

警官を仕留める気かよ…

かと言って捕まると面倒だ。「というわけで逃げるぞ」

まだ屍？だらけの現場から走り出す。

「ちょっ、待ってー」

遅れて涼も。

俺たちは裏街をあとにした。

ｅｐｉｓｏｄｅ・１４―帰宅―

「はぁ」

結局、逃げきった頃には暗くなり始めていた。
なのでご飯を食べて解散となった。

「今日は疲れたねー」

帰り道。
奈美と姉さんと3人。
涼と三波は方向が違うので途中で別れた。

「本当に疲れたな…」

「なぁに和也、だらしないわねぇ」

どの口が言ってるんだか…
しかも警察沙汰にまでしちゃって…
やっぱ、強いなぁ…

……そういえば俺は姉さんはどこであんなに強くなったのかわからない。

小さい時はよく泣いて帰ってきてたし。
別々の学校だったから何をしてるのかもわからなかった。
ただ、その時の姉さんは壊れそうなくらい不安定だった。

いつのまにこんな破壊神になったのか……

「と、着いたな」

気付くともう家の前についていた。

「またね奈美ちゃん」

「はい、和也もまたね」

「おぅ」

奈美は手を振ると自分の家の方に歩いて行った。

「あれ？送ってかないの？」

「…？なんでだ？」

「彼女なんでしょ？」

「ぶっ！！？違うって言っただろ！！？」

「え～。でもまんざらでもないんでしょ～」

「……」

姉さん…、まずその口調を止めてくれ…

「ふふふ」

「なんだよ…」

「私も負けてられないなぁ…」

頬を赤くしながら言う姉。

その仕草に少し照れてしまう。「っ……？？」

「なんでもないよ♪ほら、早く家に入るよっ」

「お、おぉ」

意味がわからん…

俺は背中を強引に押されながら家に入った。

ｅｐｉｓｏｄｅ・１５―幼なじみ―

「ふぁぁぁ」

やっぱり朝はだるい…

昨日の疲れも大きいけども…

「はーい！！みんな席ついてー！！」

先生、うるさい……

「矢上君？今、うるさいって思ったでしょ？」

「い、いや、思ってないです…」

「ふーん……」

先生は拳を鳴らしながら教壇に戻って行く。

姉さんもだけど担任も怖いな…

周りは化け物だらけだ。

俺だってけんかは強い方だと思うんだが…

「んじゃあホームルーム始めるよー」

いつもの先生の言葉でホームルームが始まる。

「んとー、前から言ってる通り、明日から学校訪問が始まります。ぜひおうちの方を連れてきてくださいねー」

「…」

学校訪問。

確か家の人に学校の生活や授業を見てもらう、言わば授業参観の拡大版。

ま、俺の家には来そうな奴はいないから関係ないか…

……

「和也っ！帰ろ」

「ん、あぁ」

放課後。

奈美に促されて学校を出る。

「ねぇ和也」

「ん？」

「明日、誰か家の人来る？」

「んー…、たぶん来ないと思うけど」

「そっかぁ…、私の家の人は来るよー」

やっぱりか。

「奈美の家族は仲いいからな」

「そう？和也の家も仲いいよね？」

確かに仲悪いわけじゃないな…

ただ行事に対する意欲がないだけ。

「だからっ」

奈美はクルッと振り返ってこっちを見る。

「和也も、お母さんでもお父さんでも誰でもいいから…、ね？」

「……お、おぅ」

……かわいいな……って何考えてんだ俺っ！！

ｅｐｉｓｏｄｅ・１６―学校訪問―

「……というわけだ」

奈美に連れてきなさいと半ば言われたようなもんだったので親に学校訪問のことを話すことにした。

親２人は顔を見合わせて驚いていた。

「か、和也？あんた熱でもあるんじゃないの？」

確かに親をこんなのに誘う生徒は少ないだろう。

しかも、こんな適当に生きている俺だ。

「母さん、１１９番だ！！具合悪そうだし、顔がよくない！！」

「ちょっと待て！！俺はなんともないから！！しかも顔がよくないってなんだ！？色が抜けてるだろ！！」

俺はそこまで柄にもないことをしているのか…？

「……うむ…」

落ち着きを取り戻した母と父。

「で、それなんだが……行けない。すまんな」

まぁ父さんは仕事か。

「んー、私も明日はねぇ…いろいろねぇ…あれこれがねぇ…ごめんねぇ」

母さんはめんどくさいから来ないと…

「まぁ、ただ聞いてみただけだから別にいいよ」

ちょっと残念…？というか奈美の期待を裏切るのが嫌だけど、そんなに大事なことじゃないから別にいいか…

「あれ？何してるの？」

「っ！？」

姉さんが帰ってきた。

本能的に防衛体制になる自分が嫌だ…

……

「ふ～ん。そういうことかぁ」
姉さんに学校訪問のことを話した。
途端、姉さんから薄ら笑いが見えた。
「……」
絶対に変なことを考えてる！！
よからぬことを考えている！！
「決めた！！」
「っ！？どうしたんですか？お姉さま！！」
まさか…
「私が学校訪問に行く！！」
「い、いや、止めたほうが……」
「もう決めたの」
マジですか…
しかも、逆らったら殺しますモードに入ってるよ…
みんなに姉さんがいるってバレるのか……

容姿はかなり自慢出来る姉なのに…

「その他もろもろがなぁ…」

「和也？どうしたの？」

「！？な、何でもないです！！」

……だ、だめだ…

ｅｐｉｓｏｄｅ・１７―学校訪問２―

「さぁて、今日は誰の親がきてるかな？」

うざい…

先生の無駄に高いテンションで１日が始まった。

後ろにはもう、数人の親が来ている。

見るとまだ姉さんは来てないみたいだ。

「じゃあ、失礼のないようにね。ホームルーム終わりっ」

先生はそれだけ言って戻っていった。

「和也っ」

「ん？どうした、奈美？」

奈美が駆け足で俺の席にくる。

「和也んち、誰も来てないじゃん！！」

「あ、あぁ、もう少しで来るんじゃないか？」

姉がな。

「あ、そうなんだ…。てっきり来ないのかと……で、お父さんとお母さん、どっちが来るの？」

「察してくれ……」

「？？？」

ガララララ

「失礼します」

「！！！！」

この声は…

来ました、今日のラスボス。

「さ、さやかさん！？」

「あ、奈美ちゃん」

姉はヒラヒラと手を振る。

「すげー美人…」

「明らかに親じゃないな…」

「つか、誰の身内だ…？」

予想通り、男どもが騒ぎだしちまった。

あんたらは何も知らないんだよ…

「大人気ね、お姉さん」

「……」

奈美の言葉に恥ずかしくなって顔を伏せた。

だが……

「和也～♪」

！！！？

「バッ、バカッ！！」

視線が一気に俺へ。

…興味？…殺気？…

いろんな視線を浴びる。

「お、お前ら？あれは姉、ただの姉だから……」

「なんで…」

「…は？」

「なんで黙ってたんだよォォォォォォォオ」

男子1名が絶叫した。

「……」

「な、奈美…、お前からも…」

「そ、そろそろ授業始まるねっ」

「なっ！？」

奈美は逃げるように自分の席に帰っていった。

「和也〜♪頑張ってね〜♪」

「…か～ず～や～…」

男達の恐ろしい形相。

バカ姉ーーーーーーーーー！！

心の中で叫んだ。

実際に言うと殺されるから。

ｅｐｉｓｏｄｅ・１８―学校訪問３―

本日の授業が終了。

瞬間、みんなが興味の目をこちらに向ける。

「和也く～ん♪ちょっとお話したいなぁ」

クラスの女子の猫なで声。

「…ぐ……」

…だが…負けん…

俺は負けんぞぉぉ！！

「…ちょっと用事が…」

「か・ず・やくん♪」

今度は男のだみ声。

「死ね」

俺は声の発生源を仕留めた。

「早く退散した方がいいな…」

カバンを持ってすぐに教室を出た。

「あ、和也っ。待ってよー」

奈美も急いで出てくる。

「あ、和也さん」

教室の前では三波が服装を整えながら待っていた。

「いつものメンバーになっちまったな…」

「俺を忘れてもらっちゃ困るぜ」

「じゃあ2人とも、行くか」

「ちょっ、無視ですか！？」

無視していても涼がついてくる。

これで本当にいつものメンバーになった。

さて、今日は疲れたし帰って寝るかな…
休みの疲れも残ってるし…
なんて考えながら校門へ。
甘かった。
俺の考えは非常に甘かった。
そう。
今日は学校訪問だった。
イコール、姉さんが来ていた。
となると…

「あ、みんな♪」
校門に姉さんが…

「姉さん…？なんでまだ学校にいる…？」
「ちょっと、和也に用事あるんだよね～」
「？？用事だったら別に家でもいいだろ？」

「いや、ちょっとね…」

「……」

なんか、いつもと違う感じ…

「というわけで！！」

「！？」

姉さんが俺の手をとる。

「和也、借りてくね♪」

「ちょっ」

俺は姉さんに手を引かれて走り出した。

「じゃ、じゃあね和也～」

助けてくれ……

ｅｐｉｓｏｄｅ・１９―私は―

「おいっ、何なんだよっ！！」

姉さんに引っ張られ、街の中までやってきた。

「ん～、どうしよっかな～」

姉さんは俺の話も聞かず周りの店を見ている。

「姉さんっ！！」

「ん？なぁに？」

何度姉を呼んだだろう？

やっと姉は俺に反応してくれた。

「こんな所まで連れてきて、何の用事だよ？」

言葉が自然と攻撃的になる。

それでも姉は笑顔を絶やすことなく、

「…私に付き合って♪」

そう言った。

「…俺、疲れたんだけど…」

まぁ、ほとんどの原因は姉だが。

「そんなこと言わないで♪」

「……」

どうしようもなくて無言になる。
そもそも様子がおかしい。
いつもの殺気がまるでない。

姉さんは無言の俺にまた問いかける。

「言葉を変えようか？」

「？？」

「私とデートして」

「は！！！？」

時間が固まると同時に、顔が赤くなるのが自分でわかった。

「だから、デート」

「……姉弟だろ…」

これは、どう答えたら良いのだろう？
たぶんふざけてなんだろうが…

「嫌？」

ここに来て姉は笑顔を崩し、泣きそうな顔をした。

卑怯な…
たとえ最恐の姉でも1人の女なわけで。

「嫌ではないけど…」

そう答えるしかなかった。

「じゃ、あそこに行こっ♪」

そう言って姉さんは俺の手を引いてデパートに入った。

……

「次、こっちに行こっか♪」

俺はいろんな場所を連れ回されていた。

そしてベタな荷物持ちという…

「まぁそうだとは思ったけどさ…」

でも、いつものような強制感はない。
ただ純粋にデートというものを楽しんでいるようだ。
俺もいつもと違って悪い気はしなかった。

「あ、見てっ」

姉さんは服が売ってある場所に駆けていく。

「ねぇ、似合う？」

服をあてがう姉さんはすごく可愛かった。

「和也？」

「あ、あぁ似合う」

「本当に？」

姉弟の俺から見ても似合うから確実だろう。
そんな姉さんを見て赤くなってしまった。

姉弟としてこの感情はマズいのでは…？
でも、似合っているのに嘘はない。

「うん、似合ってる」

「そう!?ありがとっ♪」

そう言うと姉さんはその服を持ってレジへ向かった。

「ん?買うの?」

「うん。私の切り札になるだろうから…」

「??」

切り札??

……相変わらず読めない人だな…

しかもあの服は結構高そうだったのに…

姉さんはその後、買った服を大事に抱き続けていた。

ｅｐｉｓｏｄｅ・２０―私の想い１―

「おはようございます。」

三波が話しかけてくる。

いつもの通学路。

おぼつかない足取りで歩いていた俺は三波と会った。

「おぉ」

寝不足のせいか気のない返事になってしまう。

「どうしたんですか？つらそうですよ」

そうです。

私はつらいです。

でも、姉さんのことを考えてて寝れなかったなんて言えるはずもなく。

「ちょっと勉強のし過ぎで寝不足…」

なんて、俺に合わない嘘をつく。

「そうなんですかー」
それでも三波は屈託のない笑顔で信じてくれた。

「ふぃー…」
教室の自分の席について、いつものため息。
「おっはよー♪和也ー♪」
おい奈美…
朝から『♪』なんて使わんでくれ…。
昨日から俺の立場は不安定…
「おい…俺を殺す気か…？」
周りから殺気が感じられる。
「？？」

奈美は気づいてないみたい…
相変わらずですな…

「もぅ、朝からふてくされてちゃダメでしょー」

「や、ただ眠いだけだ」

そう、俺はもとからこんな顔なのだ。
ただいつもと違うのは寝不足ということ。

「……昨日、お姉さんと何かあったの？」

「！！？…な！！ないでございますです！！」

テンパった。
ピンポイント過ぎるわ。

「かなり無理してるねぇ……また怒られたんだぁ」

不敵な目をしながら言う奈美。
だけども、今回は全くの逆なのだ。

俺としては天変地異が起きるよりすごいことだ。
あの魔王様が…まさか…

「……いや、奈美。聞いてくれるか？」
「うぇっ、どっ、どうしたの急に？」
今度は奈美がテンパっている。
「姉さんがな……」
「う、うん……」
「姉さんが…」
「姉さんが？」
「その……」
「何なのよっ！！！」
奈美がキレた！！
「すまん！！放課後でいいか？自分で言うのもなんだが、朝からこんな話はしたくない…」
「和也から言い出したのにぃ…」
そうです。
俺から言い出しました。
「悪い……」
「高い、よ？？」

「……はい……」

ｅｐｉｓｏｄｅ・２１―私の想い２―

「さぁて何があったのかな？」

授業も終わり、今は喫茶店。
近いので、他の生徒もよく来る喫茶店だ。
現に、今も俺たちの他に６人くらいいる。

そんな喫茶店に来てまで話すことでもないんだが…

「てか、涼とか置いてきてよかったのか？」

涼はともかく三波はかわいそうな気が。

「いいのいいの。三波さんにはあたしが言っといたから」

「はぁ…」

「で、何があったの？」

奈美は好奇の目をして待っている。

が、そんなに面白くもない話をこれから俺がするのだ。

「奈美…。俺の話、あんまり面白くないぞ…？しかもすぐ終わる」

「いいよ。それでもっ」

改めて言うとなると恥ずかしいな…

「では。……昨日、姉さんに街に連行されたんだ。てっきり俺は奴隷にされ、連れまわされ、亡き者にされると思った…」

「それは言い過ぎ……」

奈美のつっこみを無視して話を続けた。

……

「……ということだ」

「…はい？」

奈美が止まった。
そんな変なことを言っただろうか。
「…お姉さんが優しかった？…それだけ？」
「そ、そうだ」
「……というか何も問題ないじゃん」
そうです。
何も問題ないです。
「でも、そしたらお姉さんのこと好きになるんじゃない？」
「い、いやそんなまさか…」
「……だ、だよね？……」
？？
なんでか奈美の表情が曇った。
「あの…さ？」
「ん？」

奈美は悲しそうな顔になって聞いてくる。

「何か…その…こ、恋人的な言葉聞いた？」

「え、あ…確かデートしようとかなんとか…」

何言ってんだ俺は…

「……」

なぜか下を向いて黙る奈美。

「あ、あの、奈美さん？何か話してくれないと恥ずかしいのですが…」

「…か…ずや」

「ん？…って、何で泣いてる！？」

「！？…え、あ、な、何でもないよっ」

奈美はあわてて顔を拭くが、確かに泣いていた。

つか、周りのやつらも見てるし…

でも、久しぶりに見たな…

最後に見たのは小学校の時だったか。

確か、理由は牛乳をこぼして。
でも今回は理由がわからん…

「ねぇ…」

「ん？」

奈美は涙を拭い終えたのか、こちらを見ていた。

「あたしも…いいかな？」

「は？」

あたし…も？

――あたしとデートして…

ｅｐｉｓｏｄｅ・２２―私の想い３―

……はい？

「……奈美？」

「あっ！いやっ、こ、これはただ言葉として使っただけでっ！！そ、そんな深い意味はっ……た、ただ遊びたいだけ…」

「ま、まぁそうだよな…」

ちょっとがっかりした自分がいる。

変な期待しちまったよ…

って俺何考えてんだ！！？

「ど、どうしたの？」

「いや、ただ自分を叱ってたのさ…」

よし、冷静になってきた。

「じゃあまずここ出ようか」

「は？今から？」

「うん♪早く早く」

「ちょっ…待っ」

俺は半ば強引に手を引かれ、店を出た。

※※※※※※※

「はい、到着っ♪」

「はぁ…」

まさかの昨日姉さんと来た店。

「で…、服買う気か？」

「うん♪」

やっぱりな…

奈美は上機嫌で服を選び始めた。

俺は何もすることがないので、近くのベンチへ。

ふぅ、と息をつきながら遠くの空を眺める。

徐々に赤くなっていく空には黒い羽が飛んでいた。

「空はソーダの色…か」

奈美の言った言葉が思いつく。

子供が無邪気に言うならともかく炭酸狂が言うんだもんなぁ…

「和也ー♪」

奈美の声が聞こえたのでそちらの方を見る。

「ん？……！？」

「似合うかな…」

試着室の方を見ると、あきらかに結婚式とかに着るような、白いひ

らひらのものが…

奈美は、いわゆるウェディングドレスというものを着ていた。

「お前、どこからそんなもん…」

「あはは…あのマネキンのを脱がせちゃった♪」

向こうを見ると無様に全裸なマネキンが1人。

いや、1体か。

全裸でも、カッコつけているのが痛々しい。

「…あれ脱がせていいのか？」

「いんじゃない？どうせ売り物でしょ」

ま、いいか…

それにしても、意外と似合ってる。

「ねぇ、私も……」

「ん、何だ？」

「やっ…やっぱり後にする…」

「？」

やっぱり今日の奈美は変だ。
元気なふりをしてるが、元気じゃない……
気がする。

「あの…お客様……」

「？」

店員が寄ってきた。
全裸マネキンといっしょに。

……やっぱりか…

ｅｐｉｓｏｄｅ・２３―私の想い４―

マネキンがどんどん花嫁姿に変わって行く。
それを俺と奈美は眺めていた。

「やっぱりダメじゃねぇか」

「あはは…」

まったく…

マネキンさんに謝ってその場を通り過ぎる。

「さて、次はどこだ？」

「ん、あとは帰りにソフトクリーム食べたいな。もちろん公園に売ってるのだよ」

「あぁ…あそこか…」

確かにあの公園のソフトクリームは手作りなんだかわからんが美味

しい。

でも、女でいっぱいで男は行きづらい雰囲気。

別名、女性限定公園。

「俺、入んなくてもいいか…？」

「ダメに決まってるじゃん♪」

「……ばかやろう…。男は入りづらいの知ってるだろう？」

あの、女子たちの蔑んだ目に晒されるのは嫌だ…

「大丈夫！！」

何がだ…

「カップルなら全然オッケイだよ♪」

「！？……辞退させていただきます」

「えーー。真似するだけでいいからさぁ……」

「真似ったってなぁ…」

そういうのに縁がなかった俺としてはちょっと…

「ただ隣を歩くだけでいいから、ね？」

「……」

マジか……

※※※※※※※

来ちまった。

あの限定公園に…

「あ、売ってる売ってる♪」

「お、おい！！ここで1人にしないでくれ！！」

相変わらず女性がいっぱいいる公園だ。
明らかに俺が浮いている。

「はい、和也」

奈美は公園の隅でソフトクリームを買ってきた。

「ど、ども」

形が綺麗に整ったソフトクリームを受け取る。

「ん～♪この、白いとぐろがなんとも♪」

もっとうまそうな言い方しろよ…
まぁやっぱりうまいんだが。

「和也、ほっぺについてる」

「つくわけねぇだろ」

「あはは♪」

「食い終わったらそろそろ帰るぞ」

「はいはい♪」

ｅｐｉｓｏｄｅ・２４―私の想い５―

「綺麗な夕陽だねー」

「あぁ」

帰り道。
右手には暖かい色の空が広がっていた。

「……けっこう遠いな…」

「うん、ちょっと疲れた」

あれだけ歩いたから当たり前だろう…
俺も足が痛い。

「でも楽しかった」

「だな…。というかこんな感じだったらみんながいてもよかったんじゃ…」

「だーめ。私との約束なんだから」

「そうですかー…」

「ねぇ……」

急に奈美は顔を下げる。

この時間ということもあって、表情が見えなくなる。

「なんだ…？」

「お姉さんのこと…好き？」

「……は！？」

何言ってんだ？？

「姉さんって……姉弟だぞ？」

「1人の女性として見たら…？」

「ぅ……」

昨日の姉さんだったら好きになるかも知れない……

「…だよ」

「？…奈美？」

「やだっ！！」

「！！！？」

奈美はスカートの端を握りしめて震えていた。

「おい…どうしたんだよ…？」

「やだよ…ぅ…」

地面を見ると涙がこぼれ落ちているのがわかった。

「……奈美…？」

「私知ってるもん！！お姉さんが和也のことを好きなのを！！」

「は！？」

好き？

姉弟としてなら普通じゃないだろうか。

「姉弟だからとかじゃないっ！和也のことを1人の男として見てるんだよ！」

「っ！？」

……姉さんが？

「姉弟だぞ？ヤバいだろ…」

「そんなのどうにだってできるでしょ…？」

「……というか何でそんなこと知ってんだよ？」

「……」

奈美はそのまま喋らなくなった。
でも体は震えたままだ。

「どうしろってんだよ……」

誰に言ったわけでもない問いが心の中でこだまする。

「ねぇ…」

「ん？」

「私の好きな人ってわかる？」

「……なんとなく…」

これだけのことがありゃあ、いくら鈍感でもわかるさ。

「なぁ…奈美……」

「和也！！後ろにお姉さん！！」

「！？」

すごい勢いで後ろを向く。

いきなりすぎだろ！！

「って……」

後ろを向いたが誰も見当たらない。

ただ、今まで歩いてきた道が伸びている。

「なんだよ…嘘か……っ！！？」

俺が振り返った瞬間、口に柔らかい感触のものがあたった。

「……」

俺の目に奈美の顔がズームで写っていた。

近すぎて目のピントが合わない。

何秒そのままだっただろうか。

俺はただ呆然としてその場に立っていた。

ｅｐｉｓｏｄｅ・２５―私の想い６―

――――――

マジか…？

俺と奈美が…？

目の前には頑張って背伸びをしている奈美の顔があった。

ほんのり甘い…

さっきのソフトクリームだろうか…？

てか長い…

奈美！？

「っ」

俺は慌てて退いた。

途端に奈美が崩れる。

まさか……

奈美を揺する。

叩く。

……えぇ…

「……気絶してやがる…」

何回も揺するが全然起きない。

「…しょうがねぇなぁ」

※※※※※※※※

「ん……」

「お、気付いたか？」

「和也……。ん…ってあれっ！？」

「ははっ。そのまま置いてたほうがよかったか？」

今の状況。

ま、ただ俺が奈美をおぶってるだけなんだが。

「え！？え！？か、和也、あたし重くない？」

「お…、軽いよ」

ポカ

「お…って何よっ？」

叩かれた。

まぁ確かに軽い方だと思う。

「それにしてもまさか…」

「……！？わーーーーーー！！何も言わないでっ！！」

奈美は何を言われるかわかっているみたいだ。

しかし、俺としてもどうしたらいいか……

「和也……。今、答えはいらないから…」

「……」

「ただ、答えを聞くのが怖いだけなんだけどね…」

今はいらない、か…

それを聞いて、俺はまだ答えを出さなくてもいい、と安心してしまう。

その少しの猶予を与えてもらったことに。

「だからさ……。もう少しだけこのままで居させて…」

奈美はそう言って頭を寄せてくる。

そんな奈美がすごく愛おしかった。

ｅｐｉｓｏｄｅ・２６―翌日―

はぁ…とため息をつく。

「こんなに学校に行きづらいとは…」

気まずいというか恥ずかしいというか…

残酷なもので、早く支度しろと急かすように朝の日差しが俺に向けられている。

「へいへい。おてんと様にゃあ適いませんよ」

飯食って、歯を磨いて…。

そして学校に向かった。

※※※※※※※※※※

「あららぁ…？今日はいつもに増して元気がないですね」

「お前はいつも通りだな」

校門で三波に会う。

「はい、私はいつも通り元気ですよ♪」

「ははっ…」

なんとか笑うが疲れた顔の俺。

「まぁ、何に悩まされてるのか知りませんが頑張って下さいね」

三波は言うとさっさと走って行ってしまった。

「あぁ…きっつ」

俺は愚痴ばかり口にして教室に向かった。

※※※※※※※

教室の前で奈美がいないか確認する。

「はぁ…まだ来てないみたいだ…」

「誰が??」

「うわっ!?」

ホッとした瞬間、後ろにいたのは、奈美だった。

「入るなら早くしてね。あとつっかえてるから」

「おぅっ!?」

後ろに5人ほど。

すいませんでした……

というか、あれ?

奈美が異様に冷静だ。

これだったら俺の心配した損じゃねぇか…

「じゃね～♪」

奈美は俺がよけるとすぐに教室に入っていった。

不自然過ぎる…

「あいつ、記憶なくしたんじゃ……」

ってあれ？

奈美の鞄から紙切れが落ちた。

「ん、何だ？」

本人は気付かずに自分の席に向かっている。

拾って見てみる。

「……えぇぇぇ…」

紙切れの上の方に、明日に落ち着いて話すためのマニュアル、という題目が……

「俺より末期じゃねぇか…」

ｅｐｉｓｏｄｅ・２７―三波１―

「さぁて飯くうか」

弁当忘れたし、購買でも行こうか……

廊下に出て購買に向かう。

狙うはベーコン＆レタスのサンド。

購買で一番の人気商品だ。

階段を下りるとすでに列ができていた。

「マジか…」

一瞬で俺はあきらめた。

「あんぱんでいいか…」

俺の番に回ってきた時には、すでに残りものしかなかった。

俺はあんぱんと牛乳を買って近くの椅子に座る。

ピリ

袋を裂き、あんぱんを口に運ぶ。
情けないが、腹が減っているとあんぱんがとても美味く感じる。

「あ、和也さん？」

「ん？」

後ろを向くと三波が大きな袋を持って立っていた。

「三波か。今から飯か？」

「はい♪和也さんはけっこう質素な昼食ですね…」

可哀想なものを見る目。

「そんな目で見ないでくれ…」

「和也さん、私のわけますか？」

三波の持っていた袋からカツサンドが出てくる。

「マジで！？」

三波からカツサンドを受け取る。

「まじ助かった。塩っけのない飯だと調子でなくてな」

それを口に運ぼうとした瞬間…

「あ、条件があります」

「え…」

手が一瞬で止まる。

なんか嫌な予感……

いつもこういうときって良くないことが起こる。

下水道に忍び込まされたり。
女装させられたり。
窓割ったのを俺のせいにされたり。
ただ殴られたり。
ｅｔｃ．……

注・ほぼ全てが姉

「和也さん、何で震えてるんですか？」

「な、ななななんでもないぜ！！……で条件ってのは……？」

「明日、私がつくった弁当を食べてくれませんか？」

ｅｐｉｓｏｄｅ・２８―三波２―

弁当…ねぇ…

結局、俺は了承してしまった。

まぁあんだけ泣かれそうになられちゃあ断れん。

「ただ飯食えるしいいか」

※※※※※※※

「おはようございます♪」

「おぉ」

朝。

登校すると、校門の前で三波が待っていた。

「作ってきましたよ～♪」

三波は自分が持っていた鞄をポンポンと軽く叩いた。

「そりゃあ楽しみだ」

まぁ、今日はこれに頼るつもりで弁当を持ってこなかった。

なので持ってきてくれなかったらまた購買ということになっていた。

「てかお前料理するんだな」

「まぁ少しですけどね。小さいときから料理は好きなんです…」

「ほぉー……」

一瞬、三波が悲しそうな顔で笑ったような気がした。

「ん？」

俺は一瞬、鞄を凝視した。

いや、詳しく言えば鞄ではなくキーホルダーだ。

「？？…どうしたんですか？」

「俺、このキーホルダー見たことあるような……」

「えっ！！！？」

三波は身を乗り出すように俺に寄ってきた。

「覚えてるんですかっ！？」

「ちょっ、どうした三波！？」

「私のこと覚えてるんじゃないのっ！？」

三波はいつも使っている敬語を使わなくなっていた。

「おい、三波大丈夫か！？」

俺は近くまで寄っていた三波の体を揺すった。

「っ！？……す、すいません…ちょっとおかしくなってました……」

「あ、あぁ…大丈夫か？？」

やべぇ。

かなりびびった。

「ほんとすいません…。お弁当、お昼に渡しますね…」

「お、おう」

三波はそれだけ言うと去っていった。

「……」

どうしたんだ？

それにしてもあのキーホルダー。

それは指輪のような鉄の輪だった。

「あれは…昔どこかで…」

俺はそのキーホルダーが異様に気になった。

ｅｐｉｓｏｄｅ・２９―三波３―

さて。
昼時間になりました。
ということで、三波に中庭へと連れられてきた。
三波の手には弁当２つ。
三波は朝のことを気にした様子もなく、少し浮かれた足取りだった。

「じゃあ召し上がれっ♪」

「おぉ……」

広げられた布の上には、玉子焼きやハンバーグなどの定番メニューが乗っていた。

「じゃあいただきます」

パク

「……どうですか？」

「うまい！！」

というか母親よりうまい。

ハンバーグなんてシンプルなソースなのに…

「よかったです…」

……？

…何か違和感がある……

なんだろう…

この味…おかず…

俺はよく知っている……

「これ、自分で考えて作ったのか？」

「……どうしてそんなことを聞くんです？」

急に三波は下を向き、問に問で答える。

「……いや、この味よく食べてるような感じがするからさぁ…」

「そうですか……」

明らかに三波の様子が急変した。

少しビビるほどの怖ささえ感じるくらいだ。

でも三波はすぐに笑顔を見せた。

「どんどん食べて下さいね♪」

「お、おう」

なんだろう…

三波は俺に何かを隠してる。
確信は持てないけどもそんな気がする。
俺はそのことが気になって弁当の味がよくわからなかった。

※※※※※※※※※

放課後。
「さて、今日も帰ってダラダラだな…」
「っちょい待ち！！」
帰ろうとしたところを涼に止められる。
「なんだよ…」
「近くに新しいパン屋ができたんだよ」
「そこに行こう、と…？」

昼の事も気になってそういう気分じゃないんだが…

「あたしも行く♪」

奈美がすっ飛んできた。

「俺はどうするかなぁ…」

「ねぇ、行こうよー」

はぁ…

めんどいけどしかたないか。

「わかった。同行しよう。」

「よし、決まり！！」

「あ、三波もいいか？弁当のお礼したいからさ」

「別にいいぜー」

「あたしも別にいいよ。……って弁当!?いつの間に!?」

一応2人から許可がおりたので、三波を誘ってパン屋に向かった。

※※※※※※※※※※

「すごい人でしたね…」

パン屋を見るとかなりの行列ができている。

そういう俺たちは早めに来たということで勝ち組だった。

「うめぇ」

涼はパンを2つ持って交互に食べている。

「お前汚いぞ…」

「そういう和也さんこそ……」

「……？」

三波は、すっとこちらに寄ってきて服についたパンくずをはらってくれた。

「どうもな」

「はい♪」

三波は笑っているが、やっぱり昼のことが気になってしまう。

ま、考えてても仕方ないか…

「そういや前から思ってたんだけどさぁ」

急に涼が口を開く。

「ん？」

「和也と三波って顔つき似てるよな」

「？」

俺と三波が？

「いや、実際似てると思うんだけどな」

「言われてみれば、あたしも似てるように見えてきた」

奈美にもそうみえるのか。

「み、みなさん、な…、何言ってるんですか…」

三波は不自然に否定している。

見て分かるように三波は焦った顔をしていた。

「…見れば見るほど似てる」

「……めて」

三波は何かつぶやいた。

でも涼と奈美は話をしていて気付かない。

「目ねあたりなんてそっくりだよねー」

「やめて……」

「もしかして兄妹とかか！？」

「やめてっ！！！！！！！！！！！！！！」

「！？」

急に声を上げたのは三波だった。

「……わ、わたしは…」

三波は立ち上がって後ろに後退していく。

「ど、どうした？」

「っ！！？」

俺が声をかけると三波は後ろを向いて走っていった。

「三波っ！！」

ｅｐｉｓｏｄｅ・３０―三波４―

ジリリリリ……

「……ぐ」

あまり体調が良くない。

というか三波がどうなったか気になって眠れなかった。

「和也〜！！ご飯〜！！」

「んぉおおおぅ」

「だ、誰！？」

気の抜けすぎだ返事で姉さんが珍しく驚いた。

※※※※※※※※※※※※※

教室に着くと奈美が小走りで寄ってくる。

「三波ちゃん…は？」

「朝は見かけなかったな…」

「そっかぁ…」

結局、三波に何があったかわからん。
ただここ数日様子がおかしかったのは確かだ。

「おーす」

涼が登場。

しかも茶碗を持ちながら。

「おい、家で食ってこいよ…」

「遅れそうだったし、仕方ないじゃん」

そう言って涼はご飯をかき込む。

「……そ…うい…うが、や…みな…」

「食い終わってから話せや！！」

「んが……っと、三波普通に登校してたぞ。普通に笑って挨拶してきたし」

「は！？」

登校してたのか…

「昨日のこと聞いたけど、なかったことにしてるみたいだな」

「理由、何なんだろうね…」

まったくだ……

「問い詰めてみるか……」

涼はどっかの探偵の真似をしているのか壁に寄りかかって呟いている。

手に乗っている茶碗が痛々しい。

「三波、話すと思うか？」

俺がそう話すと涼は親指を突き出してくる。

「まず身辺調査からさ！！」

……メキ

「ぎぃゃあああ！！」

涼が立てた親指とテンションにイラついたので親指を曲げてやった。

ｅｐｉｓｏｄｅ・３１―三波５―

放課後。
結局、俺たちは三波の身辺調査をすることになった。
そして、涼に何か考えがあるそうなので俺と奈美でついて行くことに。

「なあ、どこ行くんだよ？」

「ハハハ！！教えて欲しいのかい！？なら俺が言うことをき……ぐ…はっ！！」

奈美の右手が涼の首を絞め、持ち上げている。

「早くしゃべってよ」

「ぐあ…え…が…」

「ほら、早くしゃべっちまえよ。奈美様がお怒りだぞ」

「が、ぐえ…」

あ、顔青くなってきた。

「ふん…」

奈美もそれに気づいたのか、涼を解放してする（そのまま放り投げ

ただけ）。

「……」

「あいつ生きてるか？」

「死んでてもいいけどねー」

「まぁな…。じゃ、前の喫茶店行くか」

「……ってあんたら…ひどすぎるわーーーー！！！！！！」

「うおっ！？」

涼が復活した。

「だってあんたが早く話さないのが悪いんでしょ」

「俺だって優越感に浸りたいときもあるよ！！」

おお。

涼を見ると、首にくっきりと手の跡がついている。

「ま、涼、話してくれよ」

涼は納得いかねーなんていいながらも自分の鞄を探り出した。

「まずはこれを見てくれ」

涼の鞄から一冊の冊子が出てきた。

「それってどうみても担任の…」

「そう、生徒の個人情報、その他もろもろが記載されている魔法の本さ！！」

「ばれたらやばくないか？」

「やばいどころじゃないでしょ…」

そりゃあ、今の時代、情報にはかなりの価値があるわけで。
個人情報が漏洩すればニュースになるくらいだ。

「明日元に戻しておくって」

…まあ怒られるのはこいつだからいいか。

「で、この本で調べるってことか？」

「いーや」

涼はにんまりと不敵な笑みを向けてくる。

「住所を調べて直接親に聞くのさ」

ｅｐｉｓｏｄｅ・３２―三波６―

「あれかな…」

涼が名簿表と携帯を交互に見ながら目的地に俺たちを誘導する。

道の奥に家が見える。

かなり立派な家だ。

「……」

「けっこうきたよねー……」

奈美は少し疲れた表情を見せる。

それもそうだろう。

俺たちは、いつも行く街を突っ切って郊外の方まで出てきた。

「少しくらい何か分かればいいけどな…」

「……？」

またしばらく歩くと違和感が出てきた。

足取りが極端に重くなる。

木々が取り囲むきれいな街道。

右側に見えるビルと山。

そして…

「ここは…」

体がこの場所を拒絶している。

「……ぅ…」

俺は知っている…
この道を。
この風景を。

「か、和也っ!?」

気付くと俺は膝をついていた。
同時に頭痛と吐き気が襲ってくる。
それに気付いた奈美と涼は駆け寄ってくる。

「和也、顔真っ青だよ!!」

「…」

「まさか…」

奈美は何か気付いたような素振りをみせる。
実は奈美は俺がこうなったときを1度だけ見たことがある。

7年くらい前だろうか。

まだ姉さんがよく泣いていた頃のこと。

ある日、姉さんが家出をした。

俺は理由も詳しい事情もわからなかったが、すごく心配したことは憶えている。

今はこんなでも、昔は姉さんと俺の立場は逆に近かったし…

で、その時に色々あって同じ症状がでた。

そして、たまたま通りかかった奈美が俺を家まで運んでくれたのだ。

だから、このことは奈美と俺の家族だけの秘密だったのだが…

「う…」

「和也っ！！和也っ！！」

「おい、どうしたんだよ！！」

「…ぁ…、だいじょう…ぶだ…」

ひどい頭痛と混乱はおさまってきた。

「…よし」

額は汗でびっしょり濡れていたが気分は大分落ち着いてきた。

「ほんとに大丈夫？」

「ああ…」

でも、思い出しちまったよ…

俺の人生でこれからも最大であり続けるであろう、トラウマを。

俺が昔から拒絶してきた過去を。

そして、三波との関係も。

あの弁当も、三波の素振りもこれで納得できてしまう…

俺と三波は…

「和也さん。それに奈美さん、涼さん」

「み、三波！？」

前を見ると家の門の中に三波が立っていた。

ｅｐｉｓｏｄｅ・３３―三波７―

三波は門の向こうでただ１人立っていた。
いつもよりおとなしい…
いや、悲しそうにも嬉しそうにも見える。
「先ほど世話人の方がみなさんを見かけたそうなので…」
「三波、俺、思い出した…。思い出したんだ…」
「和也さん…。敷地内に入ってもらえますか…」
俺は頭痛と吐き気を押し込みながら門をくぐる。
中にはやっぱり三波しか見当たらない。
「ここで会うのは何年ぶりですかね…」
「さあ……。俺はなんで気付かなかったんだろ…」
「いいんですよ…。この家で何があったかはわかっていますから」

「今、家の人は？」

家の人とは言いっても祖父と祖母、使用人が１５人。

「おじいちゃんは寝たきりになってしまいまして…」

「そっか…」

疎遠になった俺や両親には知らせるわけないか…

「やっぱり俺の呼び方は名前なんだな」

「外では和也さんを兄と呼ぶことができませんから…。これはきまりですし…」

三波は悲しげに笑う。

俺と離れたときに祖父としたという約束。
この家は自立するまでの権利は親権者にある。
三波はそんなものを守って生きてきた。

「だから…」

―卒業するまで待っててくださいね、兄さん

※※※※※※※※

いいですか―
あなたはこの家の人間ではなくなります―

昔、この言葉を聞いた。

俺の父さんはきまりを破って母さんと結婚した。

その2人の子が俺と三波。

その後、三波をこの家の跡取りとして残し、出て行くことになってしまう。

そして、三波…いや結衣と俺は離れて暮らすことになった。

ｅｐｉｓｏｄｅ・３４―核心―

「で、あたしたちは蚊帳の外だったわけだけど…」

「…色々と悪かったな」

「でもびっくりしたな、兄妹なんて…」

「実際、思い出した俺も驚いてるからな」

帰り道。
詳しい事情を涼と奈美に話しながら帰路につく。
昔のこと。
結衣のこと。
２人とも驚いたけど深く詮索しないでくれるところがとても助かる。

「でも、少しほっとしたかな……」

「ん？」

「な、なんでもないよ」

「ならいいけど…」

なんか奈美の会話にしては歯切れ悪いが…

「そういえばなんで気付かないの？普通、名前とかで気付かない？」

「あぁ、それか。実は三波ってのは偽の姓だ」

「偽名？」

「本当は俺と同じ苗字だよ」

あいつ、かなり我侭言ったんだろうな。

普通、偽名なんか使ったらすぐばれるのに…

あの家の力はたいしたもんだね、まったく。

でだ。

確認するべきことがひとつ増えた。

結衣は俺と兄妹だ。

それはゆるぎない真実。

でもそうすると自動的に姉さんとも姉妹になるはずだ。

なるはずなんだが結衣は姉さんは違うと言った。

一応、昔からの戸籍を見せてもらったが、姉さんの名前が出てこなかった。

「姉さんは…」

冷静になって昔のことを思い起こす。

いっしょにご飯を食べたこと。

同じ学校ではないけど、帰ってきてから宿題を手伝ってくれたこと。

公園で走りまわったこと。

……

なんで……

なんで、幼稚園以前の記憶に姉さんがいないんだ……？

ｅｐｉｓｏｄｅ・３５―沙耶香１―

自宅。

現在１８時４７分。

そう、夕飯の時刻である。

父さん、母さん、そして姉さん。
そして俺を含めたいつもの食卓。

でも、俺だけ食事に手をつけずに考えをまとめていた。

「食べないの和也？」

「いや…実は話があるんだ」

「なんだ、改まって？テスト悪かったのか？」

父さんは魚の骨をほぐしながら耳を傾ける。

「ち、違っ……くもないな」

「ちゃんと勉強しろよ」

「あぁ……ってそうじゃなくて！！」

「ん、どうした」

「ちょっと言いづらいんだけど…、今日結衣に会ってきた」

「！？」

そりゃ、びっくりするわな…

「結衣か…。そうか…元気だったか？」

「あぁ。実は学校の後輩だったし…」

「顔、見に行きたいけどねぇ…。まぁ元気でなによりね」

母さんはご飯をよそいながら話しかけてくる。

…正直、前の家の話はあんまり好ましくはない。
ほぼ確実といっていいほど空気が悪くなるからだ。
けど、結衣の話を聞いた2人は嬉しそうな顔をした。
そう。2人は。
隣に座っている姉さんは、状況を飲み込めていないのか会話に参加しようとしてこない。

「姉さん？」

「え…？あ、そうねっ、結衣ちゃんは元気かぁ」

姉さんは苦しそうに答える。

「…で、3人に聞きたいんだけど…」

ここからが本番だ。

言いづらい…けど、このまま何も知らないで生活するのも気分が悪

くなりそうだ。

ここは思い切って…

「ね、姉さんと俺って本当に姉弟？」

「違うよ」

「…って、早っ！！！！！即答かよ！！？」

「隠すこともないだろう？」

父さんは何の躊躇もなく答えた。

なんですか？この父親は？

母さんは普通に味噌汁すすってるし…

「なんで黙ってたんだよ…？」

「詳しくは姉さんから聞きなさい。あと姉さんは従姉（いとこ）だよ、従姉」

「従姉…」

俺はさっきから黙りきっている右席の住人に目を向ける。

「あ、あははっ」

姉さんは困り顔で笑っていた。

ｅｐｉｓｏｄｅ・３６―沙耶香２―

俺の部屋。
姉さんを招いて詳しく話を聞くことにした。

「父さんたちが黙ってたのは姉さんが言わないでっていってたのか…」

「うん…」

で、従姉ってのも本当らしい。
実は母さんの兄さんの娘。
その叔父さんら両親が行方不明になってからは俺の家族ということになったらしい。

「うぅ…」

姉さんが珍しく…というか久しぶりに弱くなっている。
そうしていれば嫁の貰い手くらいすぐ見つかるだろうに…

「で、でも、ちゃんと和也が聞いてきたら話してもいいからって条件付だったんだよ？」

「え…？」

「というか今まで気付かなかったのが不思議よ…」

「…」

確かに、結衣のことは人生最大の精神的外傷（トラウマ）だけど気付かない俺も俺だな…

「まぁそうか…」

「そうなのっ。じゃあ私はもう戻っていいでしょ？」

「お、おぉ」

姉さんは立ち上がって、座っていた座布団を隅に置いた。

ん？

「ちょっ、ちょっと待って！！」

「ん、何？」

急に思い立って姉さんを引き止める。
そういえば聞いてないことがあった。

「そういや、なんで父さんたちに黙ってもらおうとしたんだ？」

「えっ…」

そうだろう。
理由がよくわからない。

言われて生活が変わるわけでもない。
ましてや嫌いになるわけでもないのに。

「それは…その…」

「言えない？」

姉さん、今日は弱い…

なんか泣いてばっかの頃を思い出すな…

「和也…」

姉さんは下を向いていたがすぐに口を開いた。

「ん？」

「もう、包み隠さず話す…」

「そんなに覚悟いるのか？」

姉さんは何か決心したのか、握りこぶしを作っている。

「最初はね…最初は、もちろん、父さんたちが言わないようにしてたんだよ？小学生くらいとかは結構難しい時期だからね…」

姉さんは淡々と語る。
何か溜まっていたものを吐き出すように。

「で、本当は和也が中学生の時に教えるはずだったんだけど、その時にまだ言わないでって頼んだの…」

「…」

「ねぇ知ってる、和也…？」

姉さんは急に俺のそばに寄ってきた。
洗髪剤のいい匂いがする。

「ね、姉さん？」

「従姉ってね、結婚できるんだよ…？」

ｅｐｉｓｏｄｅ・３７―沙耶香３―

「和也……。私ね……」

近い、近い。
すぐにでも動けなくされそうな体勢。
動けなくなるのはもちろん俺だが。

「ずっと和也のお姉さんでいるのがつらいよ……。小さい時からずっと見てた。ずっと一緒にいた。実家の人の約束通り、有名な学校にも行った。辛くても頑張ったんだよっ！だってそうしなきゃすぐに離れ離れにされちゃうんだもんっ！」

「お、おい、落ち着けよ！いつもの姉さんらしくもない……」

「さすがに、私の言いたいこと分かるでしょ……？」

「……」

分かるさ……
こんだけ言われれば。
でも、俺……は……

「和也……？」

俺は姉さんを軽く押し戻す。

「……。……ごめん。俺、好きな奴がいるんだ――」

「……っ！？」

「もう、好きになっちゃったんだよ……」

「……やだよ。……やだ、やだ、やだやだやだやだやだっ！！私、我慢、してきたのにっ！ずっと、そばにいて……、それでも言えなかったの、に……っ……ぅ……」

「……姉さん」

姉さんは床にペタリと座り込んで、下を向いていた。

「……。……ごめんね」

5分くらいたっただろうか？
急に姉さんがそう言ってドアに向かっていく。

「もう、今日のことは忘れて。お願いだよ？私も、もう大丈夫だからさ。……じゃあ、ね」

何が大丈夫、だ。
目、真っ赤だったじゃないか……

なんて駄目な奴なんだろう、俺は。
俺は振り返り、後悔する。

そう、――今日は、俺が初めて姉さんを泣かせた日だった。

ｅｐｉｓｏｄｅ・３８―選択―（前書き）

すいません。
更新、かなり期間が空いてしまいました。
構成でかなり悩みまして……

今度から、ペースを上げたいと思います。
拙い文章ですが、これからもよろしくお願いします。

ｅｐｉｓｏｄｅ・３８―選択―

後悔は飽きるくらいした。
覚悟もできた。
あとは姉さんを傷つけたケジメをつけるだけ。

ということで俺は奈美の家の前に来ていた。
今日は休日。
まず家から引きずり出すところからだ。

俺は緊張しながら玄関のドアに進む。
あれだけ後悔したのにも関わらず、『もっと決定的なシーンもあっただろうに』と、また後悔する。
インターホンを押す指がなかなか前に進まない。
自分が情けなく感じる。

「ぐおおお」

唸るがやっぱり意味はない。

「ちょあああああああっ！」

叫んでみた。

「和也っ！人の家の前で何やってんのよっ！？」

２階から花瓶が飛んできて、俺の頭にクリーンヒットした。

※※※

「ちょっと……。ただの不審者じゃない、あれじゃ……」

「すまん……」

これが結果オーライというヤツだろうか。
部屋に招かれ、一応は奈美と話す機会ができた。

「で、あ、あの……」

なんでか奈美が赤くなってる。
今、一番緊張しているのは俺だろうに……

「きょ、今日はどうしたの？」

奈美は照れと緊張が混じったような声で問う。

「その、もう分かってるかもしんないけど……」

「な、何の話かな？」

こいつ惚けやがった！
首傾げてるし。

「この前の答えだよ……」

「あ、あー、あのテストね！難しかったよね？」

「何のテスト！？」

誤魔化してるのかこいつ。
見るとすごく落ち着きがない。
自分家なのにめっちゃキョロキョロしてるし。

「……。まあいいや」

「え？」

もう、言葉はややこしいし面倒くさい。
それに……

「お前も行動の方が先だったからな。文句はなしだぞ」

「えっえっ？……っ！？」

この前の帰り道とは逆の立場だった。

身を乗り出した俺に、不意を付かれた奈美。

俺は奈美に、ほんの一瞬だけのキスをした。

ｅｐｉｓｏｄｅ・３８―選択―（後書き）

本編では奈美で行くことになりました。
後で、『もし他の人とくっついたら』の話を番外編として作ろうかな、と思ってます。

でも、妹はヤバイですね。どうしよう……

ｅｐｉｓｏｄｅ・３９―俺と奈美―

奈美の部屋での出来事から３０分後――

「奈美？」

「……。……えっ！？な、何っ！？」

奈美はさっきからずっとボーっとしてる。
にやけてるし。

「えへっ……うぇっへっへ……」

怖ぇええええ！
こいつ大丈夫かよ！

「おーい」

「え、え、どうしたの和也！？」

俺の呼びかけに奈美がようやく気付いた。

「あ、いや、これから一緒に出かけようかと思うんだけど……」

「行くっ！」

「うぉっ！？」

「行きますっ！」

びびった！
すげーびびった！
いきなり身を乗り出して叫ばれたらそりゃびびるわ。
「すぐに着替えるから待ってて！」
「じゃ、じゃあ外で待ってるからな」
そう言って俺はドアの方に向かう。
「か、和也！」
「ん？」
「み、見てく？」
奈美は、服に手を掛けながら顔を赤くしていた。
「……」
照れるなら言うなよっ……
※※※
「お待たせっ」
奈美がドアを開けて飛び出してきた。

白と黒ベースのレース系の上着にスカート……
いつもとは違う、いわゆる『オシャレ』というヤツだ。

「……」

やべぇ。
超似合ってる。
ちょっとおとなしい感じなのがまた良い。

「ど、どうかな？」

「似合ってるよ」

俺は珍しく素直に感想を述べた。
元々男子に人気があるくらいだ、かわいいに決まってる。

「そ、そう？えへへ……」

にやける奈美を見ているとこっちまでにやけそうになる。

「じゃあ行くか」

「うんっ」

奈美が自然に手を繋いでくる。

最初は驚いたけど、今はすごく幸せな気分だった。

ｅｐｉｓｏｄｅ・４０―夜に目が覚めたら―

「あ、和也……」

「姉……さん」

夜中。
水を飲みに部屋から出たところ、姉さんと鉢合わせした。
５日ぶりの邂逅だった。
心なしか痩せたようにも見えるのは見間違いなのだろうか。

「……なーに？まだ気にしてるの？」

「いや……」

気まずい空気が流れる。
その中で姉さんは軽く微笑む。

「ちょっとお話しよっか？」

※※※

居間に電気をつけ、ソファーに向かい合うように座った。

「お母さんたち寝てるから静かにね」

と姉さんが指を口にあてて可愛らしく言うが、疲れを誤魔化してる

ようにしか見えなかった。

「……体調は？」

「全然大丈夫だよ。体調は」

『体調は』ってことはどこかは調子が悪いってことだ。

「それよりね、ちゃんと謝っておきたかったの」

「謝る？それはこっちだろ」

すると姉さんは顔を横に振った。

「ごめんね、私のせいで和也を悩ませた」

「……」

――好きになってごめんなさい

その言葉に、俺は反応できなかった。

ただ耳に入り、姉さんの痛みだけが伝わった。

「まだ和也のことが好きだから、これが『姉弟』としての感情になるように頑張るの」

「……」

「だからね……。これからも和也のお姉さんでいていい、かな？」
「いいに決まってるだろ？そんなこと聞くなんて姉さんらしくもない」
「……そうよね。私、和也のお姉さんだもんね」
姉さんは、自然と流れていた涙を拭い、久しぶりに笑顔を見せてくれる。
姉さんの弟でよかったと、心から思った瞬間だった。

「あ」
そう言えば奈美のこと言ってなかった。
「ん？どうしたの？」
「その……、俺の好きな奴の話なんだけど……」
「あ、奈美ちゃんでしょ」
「なんで知ってるんだよ！？」
「だって、私と部屋が隣なのに普通に奈美ちゃんと電話してたでしょ？」
やっちまった。
俺、馬鹿だった。

姉さん「奈美、誰よりも君を愛しているよ」

「そんな台詞は言ってない！」

「でもうまくいってるんでしょ？」

「……ま、それなりに」

「大切にしてあげないと駄目よ？」

「あ、ああ」

なんかすごく素直な気がする。逆に怖いくらい。

「……？ヤンデレの方がよかった？」

「いや、そのままがいいです」

つーかヤンデレって……

「じゃ、私はそろそろ寝ようかな」

「俺も寝よ」

『おやすみ』

※※※

翌朝。
窓に入る光に気付き、目が覚めた時だった。
ほっぺたに柔らかいものが触れていた。

「ん？」

「和也、おはよう」

姉さんの顔が目の前にあった。

「……姉さん？……って、うわぁあああああああああああ！！！！」

ベッドから飛び起き、部屋の隅まで後退する。

「なななななななんで！？」

「ただ起こしに来ただけじゃない。ほっぺにキスはしたけど」

「ばばばばばばばばか！何してんだよっ！」

「姉弟のスキンシップよ」

スキンシップって……

「忘れたの？私、和也のことが好きなのよ？」

「……そうですか」

「さ、奈美ちゃんが来る前に準備しちゃいなさいねー」

もう全てを暴露したことによって開き直ったのだろうか。
姉さんは今まででは考えられないくらいベタベタしてくるようになった。
まあ最初は驚いたけど、これが本来の姉さんなのかも知れない。

ｅｐｉｓｏｄｅ・４１―放課後の喫茶店―

「なあ、帰りにどっか寄ってかね？」

放課後。

帰る準備をしていると、涼に声をかけられた。

「まあいいけど」

「あたしも！」

奈美も手を上げて答える。

＜ガラッ＞

「私も行きます！」

「なんで聞こえてんの！？」

教室のドアが開き、結衣も入ってきた。

「にぃ……っと、和也さんの考えてることはリアルタイムで伝わってきます」

「な！？まさか、それじゃあ……」

「昨日、何をしてたのか当ててみましょうか？」

「え！？」

昨日！？

昨日は確か……奈美が俺の家に来て……

だが、誰にも見られてないはずだ！

姉さんも仕事でいなかったし、親にいたっては夜勤だし！

「！？」

横を見ると奈美が顔を真っ赤にしていた。

「ゆ、結衣……そのくらいで」

「ま、冗談はこれくらいにしときますか」

「冗談だったのかよ！？」

結衣は悪戯な笑みを見せて教室にあった椅子に座る。

こいつは……

前と性格が変わってないか？

「じゃ、みんな揃ったし行くか」

※※※

「で、またこの喫茶店かよ……」

前も来たような気がする。

「いいじゃねーか、ここの店員かわいいし」

涼は満足な顔をしながらコーヒーを口に運んでいた。

こいつ、コーヒーなんて飲む奴じゃないのに……

「やっぱりここのメロンソーダは格別だね」

奈美はいつも通り炭酸に飲まれてる。

酒じゃなくて炭酸に。

「すいませーん。チーズケーキとガトーショコラにモンブランをお願いします」

「結衣！？お前食べすぎじゃないか！？」

結衣はまだ食べる気なのか、メニューを眺めて悩んでいる。

「こ、こいつらは……」

「か、和也……？」

気がつくと奈美がメロンソーダをこちらに差し出していた。

「飲む？」

「あ、ああ」

ストローに口を運び含む程度にメロンソーダを飲んだ。

「えへへっ」

やばい。

今、顔真っ赤かも知れな……

「か、和也さん？」

「！！」

しまった！

結衣＋αがいるんだった！

「昨日は間接どころじゃなかったですよね？」

「なんで結衣が知ってるんだよっ！？」

やっぱりリアルタイムで俺の考えてることが伝わってる！？

「いえ、昨日の夜、和也さんの家の前を通った時に2階のカーテンが開いてたんで見学してました」

また俺のミスだった！

「あたし、海の底にある石ころになりたい……」

奈美は顔を手で隠しながらメロンソーダを飲んでいた。
器用な奴だ。

「でも幸せそうですね」

「まあな」

「おめでとうございます、兄さん」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3994e/

ソーダ色の空

2010年10月10日07時31分発行